様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月　５日現在

機関番号：13901
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：21520505
研究課題名（和文）
副詞の補部構造とその習得可能性に関する大規模コーパスに基づいた生成理論的研究
研究課題名（英文）A Large-Scale-Corpus Based Generative Theoretical Study on Complement Structures of Adverbs and Their Learnability
研究代表者
大室　剛志（OMURO, Takeshi）
名古屋大学・文学研究科・教授
研究者番号：70185388

研究成果の概要（和文）：英語では、副詞は補部を取らないとしばしば言われる。この副詞の特性が副詞を決定的に形容詞から区別していると言われる。しかし、ごく数名の研究者によって、一定の意味を有した副詞は補部を取ることが指摘されている。そこで、本科研は、大規模コーパスの検索に基づいて、副詞が補部を取った時の内部構造がどのようになっているか、また、副詞が補部を取った時、それらの副詞は文中においてどのような位置に生起することができるのか、即ち、その外部構造がどうなっているかを統語的に明らかにした。さらに、子供が一定の副詞が補部を取るような構造をどのように獲得するのかについて理論的な解明をはかろうと様々な考察に努めた。

研究成果の概要（英文）：It is often said that adverbs do not take complements in English, a property which crucially distinguishes them from adjectives. Few researchers, however, point out that those adverbs that have certain meanings take complements. This project made an attempt to explore internal structures of adverbs taking complements and to make it clear in which positions adverbs taking complements occur in sentences, i.e., external structures of adverbs taking complements, based on the search for large scale corpora. It also made a theoretical attempt to explore how children acquire complement structures of certain adverbs.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：言語学、英語、生成文法、大規模コーパス、副詞の補部構造、習得可能性、意味理論、統語理論

１．研究開始当初の背景

(1)世界最大の現代英語コーパスThe Bank of English(約6億語)とThe British National Corpus(約1億語)を使え、更にこの度、The American National Corpus(約1億語)をも使える電子環境が申請者の研究室には既に整っている。３つの大規模な英語コーパスに加え、webをコーパスに見たて、適切に検索する技術も獲得している。そのため、今迄にな

い多くの新しい言語事実の発掘と緻密な記述を行うことが可能となる。

(2)単一の言語理論に留まることなく、副詞の補部構造とその習得可能性を解明するうえで、欠くことのできない生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、構文文法といった複数の言語理論に通じているため、(1)から得られる多くの言語事実と緻密な事実観察がもたらす現代言語理論の諸理論に対する問題点を浮き彫りにし、それらの問題点を解決しうる能力を有する。

(3)従って、語法文法家やコーパスを利用した研究者はとかく言語事実面に片寄り、理論言語学者は理論的説明にとかく片寄りがちであるが、大規模コーパスと言語理論をうまくドッキングさせるという独創的な手法により、言語理論を真に押し進める実証面と理論面がバランスよく融合した研究成果が期待できる。

２．研究の目的

本研究の具体的な研究目的は研究課題に盛り込んだ次の３点である。

(1)現代英語の副詞の補部構造については殆ど解明されていない。その理由の１つに、英語の副詞は、そもそも補部を許さないという見解がこれまで理論言語学の中で採られてきたことがある。例えば、Jackendoff (1977)のＸバーsyntaxでは、副詞は［-Comp］の統語範疇、それに対し、形容詞は［+Comp］の統語範疇としている。副詞を一つの関数と見なした時、関数の項(argument)をとらないことが、副詞を形容詞から区別する決定的な相違としている。例えば、 fearful of Billとは言えても、**fearfully of Bill* とは言えない。つまり、Jackendoffは、副詞はその項にあたる補部をとらないという見解をとっている。これは、３０年後のCulicover&Jackendoff(2005)Simpler Syntaxでも変わらない。[*equivalently /comparably/similarly exotic to α ; *exotic equivalently/ comparably/ similarly to α]はどれも非文法的であると考えている。しかしながら、実際には、日本の研究者、小西（編）(1989)『英語形容詞・副詞辞典』、安藤 (2005)『現代英文法講義』、福安(1988)、Takahashi (1993) や私自身の最近の研究により、一定の意味を有した副詞であれば、その項にあたる補部を取ることが指摘されている。例えば、Each of the constructions we have considered can be treated **similarly to bare argument ellipsis**. ただし、このような副詞の補部構造に関して、体系的且つ網羅的な研究がいまだかつて一度もなされていないのが実情である。つまり、副詞の補部構造は、これ迄の英語学、理論言語学の研究において抜け落ちてしまっている。そこで、英語の周辺部を成すと思われる、副詞の補部構造の解明に、特に有効である上記３つの現代英語の大規模コーパスを用いて、母国語話者の直感や手作業による資料収集だけでは気付くことのない言語事実の発掘を徹底して行い、副詞の補部構造に関して、統語的意味的属性を徹底的に解明する。その際、大規模コーパスを用いる長所と考えられる、網羅的且つ体系的な副詞の補部構造の研究を行うことにする。

(2) (1)で解明される副詞の補部構造、補部をとる副詞を主要部とした副詞句の内部構造及び外部構造と副詞の補部構造の意味的属性を生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、構文文法といった複数の最先端の言語理論を用いて分析し、形式化した形で精密に記述する。これらの分析と記述を通して、英語の副詞補部構造がこれら複数の言語理論にもたらすそれぞれの理論上の問題点を考察し、それらの問題を克服できるように理論上の修正を施す。

(3) 補部をとる副詞は、依存、類似、相違、比較、同一などを示す論理的に２つの項を必要とする副詞に意味的に限られている。また、当該副詞が補部をとって現れうる統語環境は、詳細な調査が今後必要であるが、非常に限られている。したがって、そのように意味的、統語的に非常に制限された副詞の補部構造を子供がどのような方略を用いて習得するのかという生成文法にとって重要な習得可能性の問題をも副詞の補部構造は提起する。この習得可能性を説明しないで、ただ副詞の補部構造を記述していても、副詞の補部構造を真に説明したことにはならない。本科研では、副詞の補部構造の習得可能性を説明することに迫りたい。

３．研究の方法

本研究では、英語の副詞の補部構造を中心に取り上げ、まず、現代英語の大規模コーパス３つ、The Bank of English(約6億語)、The British National Corpus(約１億語)、The American National Corpus (約1億語) を用いて徹底的にその言語事実面を明らかにする。次に、複数の言語理論、具体的には、生成文法の統語論、概念意味論、動的言語理論、構文文法理論を用いて厳密に形式化した形で英語の副詞の補部構造を記述する。その際には、多くの理論言語学書を読み理論への理解を増しながら、福安(1988)やTakahashi (1993)といった先行研究の問題点の検討も行う。最後に、現在の理論言語学でも、まだ全く手の付けられていない、英語の副詞の補部構造に関する習得可能性の問題を、先行研究の問題点を克服しつつ、更に理論的な考察を深めながら、解決することである。

平成21年度は、(1)本科研で扱う副詞の補部構造 (They acted quite *independently* **of each other**. John was loved *equally* **with his elder brother**. He was appareled *similarly* **to the guards**. I know one husband who forces his wife to eat *separately* **from him**. *Fortunately* **for me**, I did not lose my head.)を、本科研の目的の１つである英語教育への貢献も考慮し、中型学習英和辞典『Genius』第４版を参考にしながら、『Genius』第４版で補部を指定していない副詞も含めて、The Bank of English(約６億語)、The British National Corpus(約 1 億語)、The American National Corpus (約１億語)、Web を用いて網羅的且つ体系的にどの副詞がどのような補部をとっているか、同時にどのような指定部（程度表現が指定部位置におこることが予想できる）をとっているかを徹底的に調査する。さらに、それらの副詞が主要部(head)となり、補部や指定部をとった副詞句全体がどのような分布を文内で占めるか、その統語環境をもそれぞれの副詞について調査する。そうすることで、英語の副詞の補部構造の内部構造と外部構造（文内での分布）について、母国語話者の直感や手作業による資料収集だけでは気付くことのない言語事実の発掘を体系的、包括的、且つ網羅的に徹底して行う。

(2) (i) 福安 勝則(1988a)「補部をとる Independently タイプの副詞」『英語青年』1月号, 8. (ii) 福安 勝則(1988b)「補助部をとる-ly 副詞」『鳥取大学教育学部研究報告人文・社会科学』第 39 巻, 第 2 号, 149-165.(iii) 髙橋　美智子 (1993) 「派生副詞の補部について」『筑波英語教育』14, 73-88, 筑波大学.(iv)髙橋　美智子 (1993) 「派生副詞に関する継承原理」『白馬夏季言語学会論文集』5, 62-80,白馬夏期言語学会.はもちろんそれ以外でも本研究課題に関わりを持つあらゆる記述的な研究文献と理論的な研究文献を読み、それら研究文献から、さらに副詞の補部構造に関しての理解を深

める。

(3)同時にそれら研究文献でなされている分析の理論上の問題点を、複数の最先端の言語理論の立場に立ちながら、浮き彫りにする。

(4)更に、(1)、(2)、(3)の 作業を通し、副詞の補部構造の説明すべき統語的属性と意味的属性と語用論的属性をなるべく明確な形で体系的、包括的、且つ網羅的に徹底して抽出する。

平成22年度は、(1)平成22年度は、平成21年度の研究を続行しつつ、先に挙げた副詞の補部構造にかかわる先行研究の文献でなされている分析の理論上の問題点に対して習得可能性を考慮しながら理論的解決を与えるように試みる。

(2)更に、平成21年度の研究で抽出した副詞の補部構造の統語的属性と意味的属性と語用論的属性を理論的に説明する。

平成23年度は、(1)最終年度であるため、平成22年度の研究で理論的な説明が施された副詞の補部構造に関する習得可能性をも説明できるメカニズムの解明に迫る。(2)同時に、本科研の理論面での研究成果を、申請者に交付された前科研の時にも遂行した様に、学会誌、『英語教育』等に公表する。

４．研究成果

平成21年度は、(1)本科研で扱う副詞の補部構造（They acted quite independently of each other.等)をThe Bank of English(約6億語)、The British National Corpus(約１億語)、The American National Corpus（約1億語）、Webを用いて網羅的且つ体系的にどの副詞がどのような補部をとっているか、同時にどのような指定部（程度表現が指定部位置におこることが予想できる）をとっているかを調査した。さらに、それらの副詞が主要部となり、補部や指定部をとった副詞句全体がどのような分布を文内で占めるか、その統語環境をもそれぞれの副詞について調査した。(2)(1)の研究成果の一部を「補部をとる副詞について」にまとめ、遅くとも平成22年5月9日に出版される青山学院大学教授秋元実治先生の退職記念論集に掲載していただいた。(3)本科研の内容と関連して、英語語法文法学会第17回大会のシンポジウム「大規模コーパスを英語研究に有効利用するための留意点について」を学会運営委員として企画立案し、世話役を務め、シンポジウムの司会を務めた（2009年10月24日(土)、於：龍谷大学)。(4)本科研の内容と関連して、講演会「言語研究と実証性」にて澤田治美氏（関西外国語大学)、山梨正明氏（京都大学)、柏野健次氏(大阪樟蔭女子大学)、八木克正氏（関西学院大学）の講演についてコメンテーターを務めた（2010年2月21日， 於、関西学院大学大阪梅田キャンパスーK.G.ハブスクエア大阪)。

平成22年度は、(1)本科研で扱う副詞の補部構造（They acted quite *independently* of each other. 等)を、英語教育への貢献も考慮し、中型学習英和辞典『Genius』第4版を参考にしながら、The Bank of English(約6億語)、The British National Corpus(約１億語)、The American National Corpus（約1億語)、Webを用いて平成２１年度までにやり残した副詞を取り上げ、網羅的且つ体系的にどの副詞がどのような補部をとっているか、同時にどのような指定部をとっているかを調査した。 (2)平成２１年度までにやり残した本研究課題に関わりを持つ記述的な研究文献と理論的な研究文献を読み、それら研究文献から、さらに副詞の補部構造に関しての理解を深めた。(3)研究成果の一部を「補部をとる副詞について」にまとめ、平成22年5月9日に出版された青山学院大学教授秋元実治先生の退職記念論集に掲載していただいた。(4)日本英語学会編集委員会から、*Natural Language Syntax.* By Peter W. Culicover, Oxford Textbooks in Linguistics, Oxford University Press, Oxford,

2009, xvii+490ppを書評するように依頼されたため、本科研の構文研究と深い関わりがあるため、執筆を引き受け、審査を通過し、平成23年6月発刊の*English Linguistics* 28巻１号に掲載が決定している。

平成23年度は、(1)平成22年度の研究で抽出した副詞補部構造の統語的・意味的属性と語用論的属性を記述し、理論的に説明することを試みた。(2)日本英語学会編集委員会から、*Natural Language Syntax.* By Peter W. Culicover, Oxford Textbooks in Linguistics, Oxford University Press, Oxford, 2009, xvii+490ppを書評するように依頼されたため、本科研の構文研究と深い関わりがあるため、執筆を引き受け、審査を通過し、平成23年6月発刊の*English Linguistics* 28巻１号に掲載された。(3)副詞補部の内部構造と外部構造を調査した研究成果を「補部をとる副詞の内部構造と外部構造」という研究論文にまとめ、関西学院大学教授八木克正先生の退職記念論集に掲載していただく予定である（既に初校有り）。(4)本科研には意味と形のミスマッチが絡むが、それに関連し、日本英文学会中部支部第63回大会　シンポジウム『最先端言語理論による文法におけるインターフェイスの探求』の講師を務め、「意味と統語のインターフェイス」を発表（2011年10月30日，於　名古屋大学）した。(5)同様に、東北大学情報科学研究科で行われた公開ワークショップ『言語におけるミスマッチ』の招待発表者として、「One's Way構文について一概念意味論を動的な観点から捉え直した立場からー」を発表（2011年9月17日，於東北大学）した。(6)同様に、第89回待兼山ことばの会の招待講演者として、「意味と形のミスマッチー動的文法理論の立場からー」を発表（2011年12月22日，於大阪大学）した。(7)本科研のテーマを追う上で重要である文の意味について、日頃の研究成果を社会に還元すべく朝倉日英対照言語学シリーズ第6巻『意味論』第３章「文の意味I」を執筆した（既に初校有り）。(8)上記(5)との関連で、意味と形のミスマッチが絡む「同族目的語の決定詞について」という論文を執筆し、東北大学情報科学研究科教授福地肇先生の退職記念論集に掲載していただく予定である（既に投稿済み）。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

(1) 大室剛志、「同族目的語の決定詞について」『福地肇教授退職記念論集』、査読有、2012 年（発刊予定）

(2) 大室剛志、「補部をとる副詞の内部構造と外部構造」『２１世紀英語研究の諸相（八木克正教授退職記念論集）』、査読有、2012 年（印刷中）.

(3) Omuro, Takeshi, "[Review] Natural Language Syntax, *English Linguistics*, 査読有、2011 年 28 巻第 1 号、pp. 141-149. 日本英語学会.

(4) 大室剛志、「補部をとる副詞について一 differently と independently の意味を中心に」『英語研究の次世代に向けて（秋元実治教授退職記念論集）』、査読有、2010 年、pp. 93-104. ひつじ書房.

〔学会発表〕（計４件）

(1) 大室剛志、「意味から形を見る：優先規則体系」、平成２３年度名古屋大学文学研究科シンポジウム、2012 年 3 月 3 日、名古屋大学文学研究科.

(2) 大室剛志、「意味と形のミスマッチー動的文法理論の立場からー」、第 89 回待兼山ことばの会、2011 年 12 月 12 日、大阪大学文学研究科.

(3) 大室剛志、「One's Way 構文について一概念意味論を動的な観点から捉え直した立場からー」、公開ワークショップ『言語におけるミスマッチ』、2011 年 9 月 17 日、東北大学情報科学研究科.

(4) 大室剛志、「意味と統語のインターフェイス」、日本英文学会中部支部第６３回大会、2011 年 10 月 30 日、東北大学情報科学研究科.

〔図書〕（計１件）
(1)大室剛志、朝倉書店、『意味論』（「第３章文の意味Ｉ」担当）、2012年８月発刊予定（現在印刷中初校有り）．

６．研究組織
(1)研究代表者
大室　剛志（OMURO, Takeshi　　）
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：70185388

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし